

## 『Oさんの涙』



ちょっと前まで「犬を飼う」ということは、なんだか私にとっては  
すごくハードルの高いものだった。

一生懸命、勉強して試験に合格するとか

ダイエットして10キロ痩せるとか

そういう、自分の努力でなんとかやり遂げるものと違って

とにかく、ご飯をつくって、散歩にいった、うんち掃除して、ボールを投げて、・・

ということが、

彼らの命が続く限り、ずっと続くわけで

無責任に途中下車ができないことなのだ。

人の子のようにいつか育って大人になって、

稼いで食わしてくれることもない。(そうじゃない子もいるが・・・)

全面的に私は彼らの人生を預かることになる。

もちろん、それってペットをすでに飼っている人にとっては

当たり前のことなんだけれど、

自分の世話さえままならない、凡ミスばかりの

どこか欠陥してる私にとっては

やっぱり、犬を飼うということは、

転職よりも、起業よりも、結婚よりも、離婚よりも、

ハードルの高いことだったのだ。

ところが、そんな私にも、新しい風が吹いたのだ。

それは私が二度目の離婚で、

グログロになっていたときでおなじく、離婚したばかりの

飲み友達のおさんと、焼き鳥屋のカウンターのすみっこに座って

うだうだとお互いの傷をいやしているときに吹いた風だ。

焼酎のお湯割りを5杯くらい飲んだあたりで

おさんは急にぼーと壁を見つめた。

そうしたら、なんかみるみるうちに

そのたれ目の細い目が

うるると真っ赤になってきたので

私はびっくりして目をそらし

なんかメールでもチェックするように

携帯をいじって下をむいたのだった。

(離婚そんなに辛かったんだ……。)

そしたらOさんはおしぼりで顔を拭きながら

鼻をぐずぐずいわしはじめて

こんなことを言い出した。

「財産は半分にできるけれど

子供や犬は半分にできないからさ、

なんか、仕事で夜も遅いし、家にもあまりいないから

結局、前の奥さんに両方引き取ってもらったの。

でもね、息子はもう成人しているし

なんか、悲しくないんだけど、

ルルと会えないのがね、もうさ、おれね

ダメなの。辛いんだよね、」

毎日、仕事で遅くなった彼は家の玄関をあける。

妻はリビングでテレビをみており

息子は一人暮らしで家にはいない。

そんなとき、玄関まで迎えにきて

ぶんぶんとしっぽをふって

「おかえりなさい。おかえりなさい」

と喜んでくれるのは、ヨークシャテリアのルルだけだった。

酔って帰った夜中でも、ルルは起きて待っててくれた。

ルルは彼にとっては、あったかい毛布であり、

孤立した家のなかで、ルルだけがOさんを

いつでもどんなときでも無条件で愛してくれたのだ。

ちなみにOさんは上場企業ではたらくエリートサラリーマンだ。

プレスのきいたスーツをきて、ちゃんとしている立派な大人だ。

たぶん人前で鼻水たらしなんか普段はぜったいしない。

ただ、ただ、犬が恋しくて肩をおとして泣くOさんは

今まで知っている彼とはちがったけれど

今まで知っていた彼よりも

ずっとずっと温かくて、ずっとずっと人間らしかった。

そして私は、犬を愛している人が、犬から愛されている人が

心から、うらやましくなった。

なにこれ？

こんなに、愛せるの？

こんなに、愛される？

たかが、ペットじゃないか・・・たかが・・・。

そう思いながら私は

そして、転職よりも、起業よりも、結婚よりも、離婚よりも、

ハードルの高い決断をした。

犬を飼わないともったいない人生になる！と思ったのだ。

それは4年半前のこと。

今、わたしの隣りでは、「もも」という名の

4歳のボストンテリアの女の子が腹をだしておまけにいびきをかいて寝ている。

そしてもう今のわたしには、彼女がいなかったときの

生活が思い出せない。

この子と散歩をしている時間、わたしは何をしていたのか？

この子とボール遊びをしている時間、わたしはどこにいたのか？

彼女はずっと一緒にいたかのように

すっかりわたしの人生の時間に溶け込んでいるのだ。

正直、散歩もご飯もいろいろと大変だけど

ももがいるだけで、ももを見ているだけで、

〇さんとルルのような無条件の愛が交差してくらくらする

くらいの幸せ感がでてくる。

だから毎日ももを抱っこして「ありがとう」と言う。

さて、〇さんにもあたらしい家族ができた。

まず、ペットシッターさんとかいろいろと工夫をして

ルルを引き取ることができた、そして、  
二匹の捨て猫と出会って、今3匹とひとりの生活を  
充実させているのだ。再婚できたわけじゃないけれど  
かなり、まじに幸せそうだ。



作家／営業コンサルタント

和田 裕美

わが家から